大学生の就業意識とアイデンティティ・ステイタス

深瀬裕子・荒井佐和子

Relationship between the views of ‘Freeter’ and identity status among university students

Yuko Fukase and Sawako Arai

フリーターへの親和的態度を心理的側面から調査し，大学生の職業意識や価値観に関するメカニズムを検討するため，フリーターへの肯定的態度とアイデンティティ・ステイタスとの関連を調査した。その結果，フリーターの「目標に辿り着くための試行錯誤の時期」という側面に対して，アイデンティティ達成型は早期完了型よりも肯定的態度が強かった。過去に危機を体験した学生は，危機を経験していない学生よりも，人生における迷いや立ち止まることに対して肯定的な意味づけをしているために，フリーターの過渡期的な側面に積極的な理解を示したと考えられた。今後の課題として「フリーターになった理由」を統制して検討することが挙げられた。

キーワード: 青年期，フリーター観，自我同一性

問題と目的

青年期の課題の一つに社会的役割の獲得が挙げられる。近年では社会状況の変化から，非正規雇用の広がりなどが見られ，青年の職業選択や職業意識は多様にならざるを得ない。そこで本研究ではフリーターに着目し，大学生がもつフリーター観について検討を行う。

フリーターとは，①15～34 歳の，②男性又は未婚の女性 (学生を除く) で，③パート・アルバイトして働く者又はこれを希望する者との定義が示されている (内閣府, 2003)。そもそもは，自由な生活を謳歌するフリーアルバイターのことを指し, 肯定的なイメージを伴って 1980 年代に命名されたフリーターであるが，その後の経済状況の変化などから正規雇用が叶わず「仕方なくフリーターになる」という意味も付随するようになった (渡辺, 2002)。これまでの調査や研究から，若者がフリーターになる原因として，“やりたいこと志向”の高さといった個人の性格，平和や冒険といった抽象的なものを重視する価値観の他，経済状況の悪化などといった環境要因，学生時代におけるコミットメントの低さなどが示されている (小杉・堀有・上西・中島・耳塚・本田, 2001; 白井・下村・川崎・若松・安達, 2009; 田中, 2011)。

それでは，就職の準備段階である学生は，フリーターにどのようなイメージを抱いているのか。

佐方 (2005) は，女子短大生を対象に，卒業後の進路やフリーターになる可能性の見積などと，フリーターの生き方に対するイメージ (SD 法) との関連を検討した。その結果，“フリーターになりたくない”群の方が“フリーターになってもよい”群よりも，“恰好わるい”“無責任な”“苦しい”“理解不能な”という否定的なイメージが強いことが示された。しかし対象者全体の傾向としては，フリーターは無責任で恰好わるいが，のんびりした生き方をしていると考えられており，否定的なイメージだけではないことが示された (佐方，2005)。また安達 (2007) は，若年者のフリーターという生き方や働き方に対する態度を測定するために，フリーターに対する肯定的態度尺度を作成している。この尺度は，社会におけるフリーターの役割を認める“貢献承認”，目標へ向かうための一時的な生き方として認める“プロセスとしての受容”，フリーターという新しい生き方を積極的に価値づける“積極的受容”の 3 下位尺度で構成される。都市部の大学生や専門学校生などを対象にこの尺度を用いたところ，“貢献承認”と“プロセスとしての受容”がやや高い値であったのに対し，“積極的受容”は低い値が示されている (安達, 2007)。

さて，佐方 (2005) も指摘するように，このフリーターへのイメージと青年期の重要な課題であるアイデンティティ・ステイタス (Identity Status)[1] には関連があると推測できる。アイデンティティ・ステイタスとは, Erikson (1950 仁科訳 1977, 1980) のアイデンティティ論に基づき Marcia (1966) が提唱したものである。この手法では，アイデンティティの達成を，意味あるいくつかの可能性について迷い，決定しようと苦闘する危機 (crisis) と，自分の信念を明確に表現したり，それに基づいて行動する傾倒 (commitment)[2] の 2 つの基準により，4 つに類型する。すなわち，危機を経験し傾倒もしている“アイデンティティ達成 (Identity Achievement)[3]”，危機を経験しておらず傾倒をしている“早期完了 (Foreclosure)[4]”，危機を経験している最中で傾倒をしようとしている“モラトリアム (Moratorium)[5]”，何の傾倒もしていない“アイデンティティ拡散 (Identity Diffusion)[6]”である。Marcia (1966) や無藤 (1979) が半構造化面接による手法を示した後，加藤 (1983) によって多数のデータの収集が可能な自記式の質問紙が開発されている。

以上より本研究では，大学生のアイデンティティ・ステイタスによって，フリーターの生き方に対する理解の仕方が異なるかを検討する。フリーターへの理解の仕方は，“貢献承認”“プロセスとしての受容”“積極的受容”の 3 下位尺度からなるフリーターへの肯定的態度尺度 (安達, 2007) を，アイデンティティ・ステイタスの測定に同一性地位判定尺度 (加藤, 1983) を用いる。フリーターに対してどのようなイメージや態度を抱いているかが，その青年が将来フリーターになる可能性と直接的に関連を示すわけではないが，フリーターへの親和的態度を心理的側面から調査することによって，大学生の職業意識や若者の価値観に関するメカニズムを検討できると考える。

---

[1] 自我同一性地位と訳されることもある。本稿では同一性地位判定尺度 (加藤, 1983) を示す場合以外は，「アイデンティティ・ステイタス」と表記する。
[2] 積極的関与，自己投入と訳されることもある。本稿では「傾倒」と表記する。
[3] 同一性達成と訳されることもある。本稿では「アイデンティティ達成」と表記する。
[4] 権威受容と訳されることもある。本稿では「早期完了」と表記する。
[5] 積極的モラトリアムと訳されることもある。本稿では「モラトリアム」と表記する。
[6] 同一性拡散と訳されることもある。本稿では「アイデンティティ拡散」と表記する。

フリーターに対する肯定的態度の下位尺度ごとに以下の仮説を立てた。

1) “貢献承認”とアイデンティティ・ステイタスとの関連は低い。

アイデンティティ・ステイタスは，危機と傾倒という個人の内的体験による分類である。したがって，フリーターの社会における役割という社会的価値観との関連は低いと考えられる。

2) “プロセスとしての受容”は，アイデンティティ達成が早期完了よりも高い。

フリーターを試行錯誤の過程と考える場合，この状態は危機だと認識できる。したがって，過去に危機を体験した大学生 (アイデンティティ達成) の方が，過去に危機を体験していない大学生 (早期完了) よりも，その危機を重要な体験だと理解し，受け入れやすいと予想する。

3) “積極的受容”は，アイデンティティ拡散が高く，アイデンティティ達成と早期完了が低い。

フリーターの夢を追う自由な生き方に焦点を当てた場合，傾倒を未経験である大学生 (アイデンティティ拡散) の方が，傾倒をしている大学生 (アイデンティティ達成と早期完了) よりも，フリーターのそのような状態に共感を示すと推察する。

方法

調査協力者

地方都市にある一大学の 1 年生，2 年生に調査を依頼した。回答の得られた協力者の中から欠損値のあるデータを省き，最終的に 104 名のデータを分析対象とした (男性 34 名，女性 70 名，平均年齢 19.29 歳)。

用いた尺度

就業意識　大学生の就業意識を測定するために，安達 (2007) が作成したフリーターに対する肯定的態度尺度を用いた。全 24 項目であり，“貢献承認”“プロセスとしての受容”“積極的受容”の 3 下位尺度からなる (各 8 項目)。“とても反対 (1 点)”から“とても賛成 (5 点)”までの 5 件法で回答する。

アイデンティティ・ステイタス　現在のアイデンティティ・ステイタスを判定するために，加藤 (1983) の作成した同一性地位判定尺度を用いた。この尺度は 12 項目から成り，“全然そうではない (1 点)”から“まったくそのとおりだ (6 点)”までの 6 件法で回答し，その得点によって次の 6 つのアイデンティティ・ステイタスに分類するものである。

①アイデンティティ達成型: 高い水準の危機を経験した上で現在高い水準の傾倒を行っている。

②アイデンティティ達成 - 早期完了中間型: 中程度の水準の危機を経験して現在高い水準の傾倒を行っている。

③早期完了型: 低い水準の危機しか経験せず高い水準の傾倒を行っている。

④モラトリアム型: 高い水準の傾倒は行っていないが将来の傾倒を強く求めている。

⑤アイデンティティ拡散 - モラトリアム中間型: 中程度の水準の傾倒をしており将来の傾倒の希求がモラトリアム型ほどには高くない。

⑥アイデンティティ拡散型: 低い水準の傾倒しか行っておらず将来の傾倒の希求も弱い。

結果

アイデンティティ・ステイタスの判定

加藤 (1983) の分類基準に従ってアイデンティティ・ステイタスの判定を行った (Table 1)。性差が認められなかったこと ($\chi^2 = 7.99$, $df = 5$, *n.s.*), アイデンティティ拡散 - モラトリアム中間型が半数以上を占め，その他が 10%前後であることなど，加藤 (1983) や都築 (1993, 1994) と概ね同じ傾向であった。

Table 1
アイデンティティ・ステイタスの判定結果 (人数)

	全体	男	女
アイデンティティ達成型	6 (5.77%)	2 (5.88%)	4 (5.71%)
アイデンティティ達成-早期完了中間型	8 (7.69%)	2 (5.88%)	6 (8.57%)
早期完了型	4 (3.85%)	3 (8.82%)	1 (1.43%)
モラトリアム型	12 (11.54%)	6 (17.65%)	6 (8.57%)
アイデンティティ拡散-モラトリアム中間型	61 (58.65%)	15 (44.12%)	46 (65.71%)
アイデンティティ拡散型	13 (12.50%)	6 (17.65%)	7 (10.00%)
N	104	34	70

$\chi^2 = 7.99$, $df = 5$, *n.s.*

フリーターに対する肯定的態度尺度の構造確認

次に，本研究で用いたフリーターに対する肯定的態度尺度が，安達 (2007) と同じ 3 因子構造であることを確かめるために検証的因子分析を行った。3 つの因子からそれぞれ該当する項目が影響を受け, 全ての因子間に共分散を仮定したモデルで分析を行った。適合度指標は $\chi^2 = 446.50$, $df = 249$, $p < .001$, GFI = .73, AGFI = .68, RMSEA = .09, AIC = 548.50 であった (Table 2)。信頼性を検証するため各下位尺度について Cronbach の α 係数を算出したところ, 貢献承認.82, プロセスにおける受容.88, 積極的受容.48 であった。適合度，信頼性ともに十分な値が得られたとは言えないが，先行研究との比較のために安達 (2007) と同じ 3 因子構造で分析を行うこととした。

フリーターに対する肯定的態度とアイデンティティ・ステイタスとの関連

フリーターに対する肯定的態度とアイデンティティ・ステイタスの関連を検討するため，アイデンティティ・ステイタスを独立変数，フリーターに対する肯定的態度尺度とその下位尺度得点を従属変数とする一要因分散分析を行った (Table 3)。その結果，アイデンティティ・ステイタスによる違いが“プロセスとしての受容”で認められた ($F(5, 98) = 2.41$, $P < .05$)。Tukey 法による多重比較を行ったところ, アイデンティティ達成型が早期完了型よりも“プロセスとしての受容”が高かった。その他の得点では有意な関連は認められなかった。

Table 2

フリーターに対する肯定的態度尺度の検証的因子分析結果

	貢献承認	プロセス受容	積極的受容
フリーターを活用する会社は多い	.71		
フリーターは現代社会でなくてはならない労働力だ	.68		
フリーターは社会の役に立っている	.62		
フリーターが支えている領域は多い	.60		
フリーターのような労働者を社会が求めている	.60		
ファーストフードやコンビニエンス・ストアではフリーターの存在が大きい	.58		
フリーターがいなかったら成り立たない産業がある	.56		
フリーターは雇い主にすれば重宝（大切）な存在	.48		
フリーターは夢に向かうためのステップになる		.77	
フリーター経験は決して無駄ではない		.75	
フリーターは試行錯誤の一プロセスである		.74	
フリーターは悪いことではない		.74	
フリーターに対して偏見を持つべきではない		.71	
フリーターをしながら目標が見えてくることもある		.71	
フリーターは就職するまでの準備期間になる		.62	
フリーターは自分探しに必要な期間だ		.54	
フリーターは恰好いい生き方だ			.69
フリーターは自由を追求する生き方だ			.66
フリーターとして生きるのもいい			.63
フリーターでも充実した生活が送れる			.58
フリーターは一歩進んだ働き方だ			.57
フリーターは賢い選択である			.55
フリーターは新しいライフスタイルだ			.52
フリーターは豊かな社会の象徴だ			.15

因子間相関	貢献承認	プロセス受容	積極的受容
貢献承認	—	.24	.07
プロセス受容		—	.60
積極的受容			—

χ^2 = 446.50, *df* = 249, *p*< .001; GFI = .73, AGFI = .70, RMSEA = .09

Table 3

アイデンティティ・ステイタスによるフリーターに対する肯定的態度の分散分析結果

	A	A-F	F	M	D-M	M	全体	*F* 値	多重比較 (Tukey)
フリーター肯定的態度	3.37 (.41)	3.19 (.51)	2.72 (.23)	3.14 (.46)	3.08 (.48)	2.99 (.45)	3.08 (.47)	1.15	
貢献承認	3.75 (.83)	3.34 (.51)	3.19 (.13)	3.53 (.81)	3.29 (.60)	3.38 (.51)	3.36 (.61)	0.89	
プロセス受容	4.10 (.66	3.70 (.71)	2.78 (.31)	3.57 (.45)	3.51 (.68)	3.33 (.63)	3.51 (.67)	2.41*	アイデンティティ達成型＞早期完了型
積極的受容	2.25 (.54)	2.53 (.74)	2.19 (.51)	2.32 (.66)	2.43 (.87)	2.26 (.61)	2.39 (.78)	0.27	

注 1) A: アイデンティティ達成型 (Identity Achievement), A-F: アイデンティティ達成 - 早期完了中間型 (AF-intermediate), F: 早期完了型 (Foreclosure), M: モラトリアム型 (Moratorium), D-M: アイデンティティ拡散-モラトリアム中間型 (DM-intermediate), D: アイデンティティ拡散型 (Identity Diffusion)

注 2) 得点は平均値，括弧内は標準偏差である。

df=5, 98, **p*＜.05

考察

本研究は，過去の危機や現在の傾倒などから分類されるアイデンティティ・ステイタスと，フリーターへの肯定的な態度との間に関連が認められるかを検討することを目的とした。以下，3 つの仮説について考察し，今後の課題を挙げる。

社会的価値のある労働力として

“貢献承認”はアイデンティティ・ステイタスと関連を示さないと仮説を立てたところ, Table 3 に示した通りこの仮説は支持された。この結果から，危機体験の有無や，物事に打ち込んでいるか否かという個人的体験と，フリーターが社会において意義があるかという価値観との関連は低いと考えられる。なお，安達 (2007) の研究が“フリーターに接する機会の多い”都市部にて専門学校生や，大学 1 年生から 4 年生までの広い対象に行われたのに対し，本研究は地方都市にて就職活動前の大学 1 年生，2 年生を対象とした。このことから，本研究の調査協力者はフリーターと接する機会が比較的少なく，社会経済への意識がまだ低いために，アイデンティティ・ステイタスとの関連が示されなかったという説明も可能である。

目標に辿り着くための試行錯誤の時期として

過去に危機を体験したアイデンティティ達成は，危機を経験していない早期完了よりも，“プロセスとしての受容”が高いと予想した。Table 3 に示した通り，アイデンティティ達成型は早期完了型よりも有意に得点が高く，仮説は概ね支持された。アイデンティティの達成には，その経験を危機であると認識したうえで真摯に向き合う姿勢が求められる。アイデンティティ達成型は，人生において迷い立ち止まることが，長期的に見れば意義のあることだと体験を伴って理解をしている群である。したがって，フリーターの「目標に辿り着くための試行錯誤の時期」という部分に積極的な理解を示したと考えられる。

夢を追える自由な生き方として

現在の傾倒を未経験のアイデンティティ拡散は，傾倒をしているその他の型よりも“積極的受容”得点が高いと予想したが，この下位尺度において有意な差は認められなかった。これは，調査協力者の中のフリーター像が一貫していなかったことが一因である可能性がある。「問題」で述べたようにフリーターの定義は客観的事実に基づいているが，いくつかの研究では明確な職業展望を持たない“モラトリアム型”や，芸術家になるためにあえてなった“夢追い型”などに分類している (小杉他, 2001; 戸塚, 2008)。そしていずれの理由でフリーターになったのかによって，フリーターに付随されるイメージが異なることが示唆されている (福井・田中, 2004)。本研究では，第 2 因子の“プロセスとしての受容”は，“フリーターは夢に向かうためのステップになる”などの項目から成るため“夢追い型”であることが想定しやすい。しかし，第 3 因子の“積極的受容”は，“フリーターは恰好いい生き方だ”“フリーターは自由を追求する生き方だ”などの項目から構成されており，フリーターになった背景要因は調査協力者それぞれに委ねられる。したがって，フリーターという言葉に対して調査協力者がそれぞれのフリーター像を抱き，それが回答に影響を及ぼした可能性が示唆される。

今後の課題

本研究では，フリーターへの肯定的な理解とアイデンティティ・ステイタスが関連するかを検討した。フリーターを目標に向かうプロセスだと認識した場合，人生における危機の意味を理解しているアイデンティティ達成型は肯定的な態度を示すことが認められた。しかし,「フリーターになった理由」が不明瞭であり，調査協力者によってフリーターに対する認識が異なっていた可能性が示唆されたことから，今後は「フリーターになった理由」を統制して検討する必要がある。

引用文献

安達智子 (2007). 若者層のフリーターに対する肯定的態度の構造と規定要因　実験社会心理学研究, **47**, 39-50.

Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. New York: W. W. Norton.
(エリクソン, E. H. 仁科弥生 (訳) (1977, 1980). 幼児期と社会 1, 2　みすず書房)

福井裕香・田中奈緒子 (2004). 理想自己と自尊感情との関連――フリーターと学生との比較――昭和女子大学生活心理研究所紀要, **7**, 59-65.

加藤　厚 (1983). 大学生における同一性の諸相とその構造　教育心理学研究, **31**, 20-30.

小杉礼子・堀有喜衣・上西充子・中島史明・耳塚寛明・本田由紀 (2001). 大都市の若者の就業行動と意識　調査研究報告書 No. 146――広がるフリーター経験と共感――　日本労働研究機構

Marcia, J. E. (1966). Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, **3**, 551-558.

無藤清子 (1979). 「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性　教育心理学研究, **3**, 178-187.

内閣府 (2003). 平成 15 年版 国民生活白書　ぎょうせい

佐方哲彦 (2005). 女子短期大学生のフリーター観に関する研究　武庫川女子大学発達臨床心理学研究所紀要, **7**, 17-25.

白井利明・下村英雄・川崎友嗣・若松養亮・安達智子 (2009). フリーターの心理学――大卒者のキャリア自立――　世界思想社

田中佑子 (2011). 就労動機と職業未決定が大学生のフリーター希望に与える影響　関係学研究, **38**, 5-14.

戸塚唯氏 (2008). 夢追い型，無目的型，不本意型のフリーターに対する大学生の態度　千葉科学大学紀要, **1**, 81-88.

都筑　学 (1993). 大学生における自我同一性と時間的展望　教育心理学研究, **41**, 40-48.

都筑　学 (1994). 自我同一性地位による時間的展望の差異――梯子評定法を用いた人生のイメージについての検討――　青年心理学研究, **6**, 12-18.

渡辺裕子 (2002) 大学生におけるフリーター志向とその形成メカニズム　駿河台大学論叢, **24**, 83-104.